

特別 インタビュー

新会長にきく 日本獣医がん学会の これからのプラン

小林 哲也 先生 日本獣医がん学会 会長

2025年7月に一般社団法人日本獣医がん学会の新会長に選出された日本小動物がんセンター センター長の小林哲也先生。現在会員数3,100名を超える日本獣医がん学会のかじ取りをこれからどう担うか、インタビューの機会を得たので、その一部を紹介する。

(MVM編集部)

はじめに

一日本獣医がん学会の新会長となり、心境の変化などはありますか？

小林哲也先生（以下、小林）：私は長く本会の理事として活動し、2024年に日本で開催された世界獣医がん学会（WVCC2024）では大会長を務めさせていただきました。そのため、会長に就任したことでの心境の変化はあまりなく、これまでと同様、やるべきことをやるだけだと考えています。

ただ、会長となって最も大きな変化は、本会における今後数年間の方向性を形作ることができる点です。本会では現在、3つのプランを企画検討しています。

がん学会が掲げる3つのプラン

1

学会コンテンツの
さらなる充実と
「学びの循環」

小林：1つ目の柱は、本会の中核を担う全国の臨床獣医師の皆さまに向けた学会コンテンツを、さらに発展させていくことです。現在、がん学会が主催する各種コンテンツは、すでに非常に高い完成度を誇っていると思います。これは、初代会長・

山根義久先生をはじめ、信田卓男先生、南 毅生先生、藤田道郎先生、そして前会長の石田卓夫先生の卓越したリーダーシップのもと、がん学会企画委員が丹精込めてつくり上げてこられた成果にほかなりません。

とはいえ、近年の臨床腫瘍学の潮流を踏まえると、私たちが今後、新たな領域へと発展の幅を広げていく余地は、まだ大きく残されていると感じています。実際、2024年に日本で開催されたWVCC2024では、海外参加者からは「非常に質が高い」と高い評価をいただいた一方で、国内の一部の先生方からは「内容が難解だった」との声も寄せられました。この背景には、近年の臨床腫瘍学が、分子生物学や腫瘍免疫学の知見を取り入れた診断・治療法へと急速に進化しているという現状があります。これは医学全体にも共通する大きな潮流で、癌という複雑な病態をより深く理解するうえでも、ごく自然な学問的進歩です。一方で、分子生物学や腫瘍免疫学は比較的新しい領域であり、大学教育や卒後研修で体系的に扱われる機会が十分でなかった経緯もあります。そのため、こうした内容を難しく感じる先



生方が多いのは、むしろ当然のことだといえるでしょう。実際、多くの臨床獣医師が求めているのは、「明日、目の前のがん患者の診断・治療に直結する実践的な情報」です。そして、そのニーズを本会も十分に理解しています。対面形式で複数のセッションが並ぶ場では、臨床的かつ実践的なテーマに関心が集中するのも、きわめて自然な流れだと思います。

そこで今後は、対面形式の学会では臨床的で実践性の高いトピックを中心に引き上げつつ、近年の臨床腫瘍学のトレンドを理解するうえで欠かせない基礎知識については、オンラインでじっくり学べる体系を構築したいと考えています。すなわち、「対面×オンライン」の明確な役割分担を行うハイブリッド型の構成とすることで、全国の臨床獣医師の皆さまが、無理なく、かつ効率的に最新の知見へアクセスできる環境を整備していきたいと思っています。

本会は夏と冬の年2回の学会開催ですが、そのあいだ、およそ10ヵ月もの期間は、どうしても情報提供が十分にご提供できていないという現状があります。そこで、この10ヵ月を基礎的な学びの時間として位置づけ、年2回の学会開催は“学びの集大成と振り返りの場”として結びつけることで、年間を通じた「**学びの循環**」を実現したいと考えています。

また、会員の先生方は日々の診療で大変ご多忙であることを踏まえ、基礎講座については受講期間を設けず、オンラインのアーカイブ配信によって「いつでも」「必要なときに」視聴できる環境を整備する予定です。こうした仕組みにより、先生方がご自身のペースで臨床腫瘍学の基礎力を着実に高めていただけることを願っています。

2

国際化

小林：2つ目の柱は、国際化です。WVCC2024はその好例であり、本会が世界のなかで一定の役割を果たし得ることを示してくれました。日本の獣医腫瘍学、とくに臨床の水準は国際的にみても遜色なく、その蓄積をアジアの先生方とも共有でき

ばと考えています。

また、アジア獣医内科学専門医協会（AiCVIM）も近年活動が活発化しており、アジア全体で専門性を高めていこうとする流れが少しずつ形になりつつあります。こうした取り組みと歩調を合わせながら、WVCC2024の日本開催を通じて得られたつながりを、将来的にはアジア各国、さらには世界との着実な協力関係へと、無理のない形で広げていければと考えています。

—そういう意味でもWVCC2024開催は非常に大きなものだったといえますね。

小林：その通りで、WVCC2024はまさにオリンピックのような存在であり、日本が世界から注目を集める貴重な機会となりました。実際に「日本に来て本当によかった」とおっしゃる海外の先生方も多く（今だにそのような声をいただきます）、この経験は日本の獣医腫瘍学にとって大きな財産になったと感じています。

3

研究部門の強化、 「臨床と研究の循環」

小林：3つ目の柱は、研究部門の強化です。これは本会にとって、今後もっとも大きな伸びしろをもつ領域かもしれません。腫瘍に関心をもつ臨床獣医師と研究者が連携し、会員から集まった症例データや各種リソースを研究者に託し、その成果が

再び本会へ還元される。そうした“臨床と研究の循環”を確立したいと考えています。

この循環が定着すれば、研究者と臨床獣医師が一体となり、オールジャパンとして活動できる学会へと成長していく基盤ができます。そうでなければ、国際的な競争についていくことは決して容易ではありません。日本には優れた研究者が多数いるにもかかわらず、その力が十分に束ねられていないことが現状の課題です。加えて、国内の動物数は限られており、各施設が個別に研究をすすめては、症例数の面でアメリカのような大規模データに対抗することは難しいという現実があります。

だからこそ、本会がその“まとめ役”を担い、リソースや症例データを集約する核となることで、世界と肩を並べられるようになる。日本の獣医腫瘍学がもつ潜在力を最大限に引き出すためにも、本会が臨床とリサーチの「ハブ」として機能していくことを目指しています。

—3つのプランはすべてつながっているように感じます。

小林：はい、その通りです。私が目指しているのは、腫瘍に関心をもつ方々が同じ方向を向き、力を発揮しやすい環境を整えることです。臨床の現場で得られた経験やクリニカルクエスションが研究者に渡り、研究者はそれを新たな“シーズ（種）”として育てる。そしてその成果が、新しい診断法や治療へとつながっていく。そうした「**臨床と研究の循環**」を創ることが理想です。その大きな流れを描き、すすむべき方向を示していくことこそ、私に与えられた役割だと感じています。



—現在、アジアには小動物の腫瘍学会というものは無いように思います。

小林：ないからこそ、創っていくのです。たとえばAMAMS（アジア獣医学専門医会議）におけるアジア獣医内科学会は内科全般を対象としており、腫瘍に特化した枠組みは存在しません。だからこそ、JVCS（日本獣医がん学会）を起点に、将来的にはAiVCS（アジア獣医がん学会）のような組織を立ち上げていく必要があるのかもしれない。

アジア圏には、小型犬のデータが集まりやすいという大きな特色があります。欧米では犬の平均体重がおおよそ30kgとされますが、日本では約70%の犬が10kg未満であり、その点で集積される症例の性質が大きく異なります。現在、欧米のオンコロジストはこの小型犬の腫瘍データに強い関心を寄せています。その背景には、アメリカで現在最も人気のある犬種がフレンチ・ブルドッグであるという現状があります。近年、飼育頭数が急増したフレンチ・ブルドッグが、これから腫瘍発生年齢に差し掛かるため、腫瘍症例が今後確実に増加すると予測しています。フレンチ・ブルドッグは腫瘍性疾患が少なくありません。このため、日本には世界が求める“小型犬の腫瘍データ”が着実に蓄積されているといえます。さらに、小型犬に対する化学療法の薬用量や治療経験など、日本が長年にわたり試行錯誤を積み重ねてきた40年近い臨床データは、今後、国際的に重要な役割を果たす可能性があります。これらの知見を世界へ提供する機会が、近い将来、確実に訪れると考えています。

—貴会の課題に対しての解決策にもきこえます。

小林：おそらく、これらは多くの会員の皆さまがこれまで抱えてこられた課題でもあり、日本全体の状況をみても、今まさに大きくダイナミックに動ける空気が生まれていると感じています。いくつかの施策についてはすでに理事会

にて承認され、実現に向けて取り組んでいるところです。順次、皆さまへお知らせいたしますので、ぜひ期待してお待ちいただければと思います。

—全国の全世代の臨床獣医師に腫瘍に関する良質な情報を提供するという意味では、紙媒体の重要性もあるように思いますが、いかがでしょうか。

小林：まさに出版社さんらしいご質問ですね（笑）。私自身は、ハイブリッドこそ最適な形だと考えています。紙媒体にもオンライン配信にも、そして対面式の学会にも、それぞれに固有の価値があります。紙には紙ならではのよさがあり、書籍が完全になくなることは決してないでしょう。いっぽうで、著作権の問題から、今後は翻訳書の出版が大幅に減っていく可能性があります。その代替として、AI技術の進歩により、論文や英語書籍をAIに取り込み、自然な日本語で読み解くという方法がすでに実用段階に入りつつあります。こうした技術が普及することで、海外の知識にアクセスする手段はむしろ多様化していくと感じています。

日本獣医がん学会が考えている将来構想

—先のプランにつながる具体的な企画などは何かお決まりでしょうか。

小林：数多く考えていますが、その一部をご紹介します。

1

日本獣医がん学会 認定愛玩動物看護師 制度（仮名）の創設

小林：1つ目は、愛玩動物看護師を対象とした「日本獣医がん学会認定愛玩動物看護師制度（仮名）」の創設です。2025年から愛玩動物看護師会員を新設し、同年7月の学会開催では、はじめて愛玩動物看護師向けのプログラムも実施しました。そして、新たに発足した愛玩動物看護師ワーキンググループを中心に制度設計をすすめており、本制度は単なる認定試験だけではなく、臨床経験を加味した認定制度とする方向で検討しています。実現すれば、腫瘍に関する知識を深めたい愛玩動物看護師のニーズに応える有力な受け皿になると考えています。

また、本制度と並行して、愛玩動物看護師向けのテキスト整備も重要な課題です。しかし、書籍の完成を待って制度を開始すると多くの時間を要してしまいます。そこでまずは、すでに十分な知識と経験をもつ愛玩動物看護師を認定し、その後、認定愛玩動物看護師が中心となって現場で必要とされ



る情報をまとめ、テキストとして形にしていく。そのような段階的な流れがもっとも現実的かつ効率的だと考えています。

2

認定医制度から 専門医制度へ

小林： 本会には獣医腫瘍科認定医制度として認定医I種・II種がありますが、専門医制度はまだ整備されていません。将来的には、この枠組みをアジア獣医内科学専門医(腫瘍学)へとつなげ、実症例の経験を重視した専門医の育成へと発展させていきたいと考えています。認定医I種の先に、もう一段高いステップを設けることで、学習意欲やキャリア形成への動機づけにもなるはずです。この方向性は、先に触れた本会認定愛玩動物看護師制度(仮名)の考え方とも共通しています。

3

ご家族向けの 情報発信

小林： もうひとつ重要だと考えているのが、ご家族への情報発信です。医学の分野では、国立研究開発法人国立がんセンターが信頼性の高い情報を体系的に整理していますが、その動物版をつくりたいと考えています。ご存じのとおり、インターネットには玉石混交の情報があふれ、情報に翻弄されてしまうご家族に出会うことも少なくありません。商用的な情報も多く、何が正確で、どれが推奨される治療なのかを一般の方が判断するのは非常に難しい状況です。だからこそ、本会が正確で公平な情報を責任をもって届ける体制を整えることが重要だと考えています。

また、癌の早期発見に関しては、動物病院だけで担える部分には限界があります。これは私がキャットリボン運動(猫の乳腺腫瘍の早期発見を目指す活動)に取り組んでい

る理由とも重なります。ご家族が愛猫の腫瘍を小さい段階でみつけてくだされば、完治の可能性も高まりますし、犬の口腔内メラノーマや肺がんなども、早期発見によって救命率は大きく向上します。こうした事実を幅広く知っていただき、受診につながる“きっかけ”をつくるのがきわめて重要だと感じています。

これらの取り組みが互いに連動し、「臨床・教育・リサーチ・市民啓発」がシームレスに循環する仕組みが整えば、日本の獣医腫瘍学はさらに発展していくはずです。それこそが、私が描く本会の目指す姿です。

—これまでのお話から、小林先生のこれまで行ってきたものがすべて最後のゴールから逆算して動かれているような印象を受けます。

小林： 私の行動の根底にあるのは、すべて“一人でも多くの動物とご家族を助けたい”という理念です。人との出会いから新たな発想が生まれたり、時代の流れに合わせて、かつて必要とされた仕組みをあえて切り分けてきたこともあります。方法論は変わり続けても、この理念だけは、私が獣医師になったときから一度も揺らいだことはありません。

結局のところ、「動物とご家族を幸せにするために、何が最善なのか」という点から逆算すると、今取り組んでいるさまざまな施策に自然と行き着きます。すべては、そこに向かうためのプロセスにほかなりません。

おわりに

—最後に、日本獣医がん学会会長として、臨床に携わる獣医師および愛玩動物看護師の方に一言お願いします。

小林： これらの構想は私ひとりの力では到底実現できません。現時点では、まだ“絵に描いた餅”にすぎない部分も多く、形にしていくためには多くの方々のお力添えが欠かせません。それでも、現在の獣医腫瘍学をよりよい獣医療へとつなげ、未来の動物たちとご家族のためにできることを広げていくためには、今、この瞬間から、皆さまとともに歩みをすすめる必要があると強く感じています。本会の理念と取り組みにご理解をいただき、可能な範囲でお力をお貸しいただければ、これほど心強いことはありません。

一つひとつの努力が結びつき、未来の動物たちとご家族の幸せへと確かな形でつながっていく。その流れを、皆さまとともに作り上げていけることを、心より願っております。

—貴重なお話、ありがとうございました。